〔国際シンポジウム〕

■12月14日　研究グループ②「大旅行調査」からみる近代中国像グループ

報告テーマ「東亜同文書院・大旅行調査から見る近代アジア」

趣旨説明

東亜同文書院「大旅行」調査は、1907年（書院5期生）から開始された、卒業前の一大イベントであり、数名で班を編成して数か月間、中国大陸等の各地において調査を実施するものであった。30有余年にわたって20世紀前半の中国やその周辺を記録したコースの総数は700本近くに及ぶ。その調査結果は、調査報告書や大旅行記などにまとめられ、近代中国を知るための貴重な史料とされている。

愛知大学東亜同文書院大学記念センターにおいては、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の一環として展開されている研究領域の一つとして、「大旅行調査」からみる近代中国像グループを設定している。本シンポジウムは、その構成員を中心として、現在までの研究成果を公表するものである。ただし、本研究グループは発足したばかりであり、研究も緒についたばかりである。今後の展望を語り、それについてヒントを得ることが本シンポジウムのもう一つの大きな目的である。

本シンポジウムでは、報告を3部に分ける。第1部では、藤田報告および劉報告によって、総論的に大旅行調査の全体像を提示する。

第2部では、東南アジア調査に関する加納報告、四川調査に関する松岡報告、雲南調査に関する増田報告を通じて、大旅行調査の南への外延を観察する。

第3部では、大旅行調査から見えてくる日本の北部から中国への昆布輸出に関する高木報告において近代の日中関係の一断面を捉えるとともに、内モンゴル調査に関する暁報告とモンゴル調査に関するウリジトクトフ報告を通じて大旅行調査の北への外延を観察する。

そして、第4部において、黄・宋両氏のコメントを得たのちに総合討論を実施する。本シンポジウムを通じて、東亜同文書院が展開した大旅行調査について、より広い文脈から新しい知見がもたらされ、今後の調査・研究に資することを祈念するものである。なお、本研究グループの構成員は、現研究期間満了時、研究成果を書籍として出版し、その成果を世に問うことを目標としている。

文部科学省　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
研究プロジェクト/「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」
研究グループ②「大旅行調査」からみる近代中国像グループ
代表　愛知大学国際コミュニケーション学部教授　**加納　寛**